
【テキスト中に現れる記号について】

《》：ルビ
(例) 偷《ぬす》んで

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号
(例) 一行|毎《ごと》に

[#]：入力者注 主に外字の注記や傍点の位置の指定
(数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと行数)
(例) [# 濁点付き片仮名ㇿ、1-7-83]ーナス

/ \：二倍の踊り字(「く」を縦に長くしたような形の繰り返し記号)
(例) とう / \

私はあなたが家事の暇を偷《ぬす》んで『傳説の時代』をとう / \ 仕舞《しまひ》迄《まで》譯し上げた忍耐と努力に少からず感服して居ります。書物になつて出ると餘程《よほど》の頁数になるさうですが嘸《さぞ》骨の折れた事でせう。原書は私の手元にもあるから承知してありますが、一寸《ちよつと》見ると四六版の小形の冊子に過ぎませんけれども、活字は細《こま》かし、上下は詰つてゐるし、讀むのにさへ随分《ずいぶん》の時間は懸《かか》ります。況《ま》して一行|毎《ごと》に譯して行くとなつたら、それを專業にする男の手でもさう容易《たやす》くは出来ません。況《ま》して夫の世話をしたり子供の面倒を見たり弟の出入に氣を配つたりする間に遣《や》る家庭的な婦人の仕業《しわざ》としては全くの重荷に相違ありません。あなたは前後八ヶ月の日子《につし》を費《つひ》やして思ひ立つた翻譯を成就《じやうじゆ》したと云《い》つて寧《むし》ろ其《その》長きに驚ろかれるやうだが、私は却《かへ》つて其《その》迅速《じんそく》なのに感服したいのです。

出版に就《つい》て私の序文が御入用だとの仰《おほせ》は謹んで承りましたが、私はあらゆるミスに就《つい》て何事もいふ權利を有《も》たない無學者なのだから少からず困却します。私は希臘《ギリシア》の神話に就《つ》いて、あそこを少し、こゝを少し、と云つた風にうろ覚えに覚えてはゐますが、系統的には研究もせず、批判もせず、漫然と今日|迄《まで》經過して來た事を、今日あなたの前に自白しなければならなくなりました。あなたの御譯しになつた原書は、今でもちゃんと私の書架《しょか》の中に飾《かざ》つてあります。それを買つたのは何時《いつ》の頃の事が覚えてゐない位《くらゐ》ですから定《さだ》めし古い昔だらうと思ひます。けれども其《その》昔に買つた本を、今日|迄《まで》まだ一度も眼を通した記憶がないのも慥《たし》かな事實ですから、私は希臘《ギリシア》の神話にかけては、あなたよりも遙《はる》かに無知識なのです。立派な序文の書けやう筈《はず》がありません。

御存じの通り私は英文學出身のものでありますから、高等學校在學の頃から歐洲文學の根柢《こんてい》に横《よこた》はる二つの寶庫(聖書と希臘《ギリシア》神話)をいつか機會を見て思ふまゝ熟覽して置きたいといふ希望を抱いてゐましたが、御恥づかしい事に、此《この》機會は永久に多忙な自分の眼前に遂に出現せずに済《す》んで仕舞《しま》ひました。

私が高等學校にある頃同級生に松本亦太郎(今の文學博士)といふ人がゐました。此《この》人は其《その》頃熱心な基督《キリスト》信者でしたが、ある時私に、聖書を日に何頁づゝとか讀むと、丁度《ちやうど》三年目に新舊兩約全書を通讀する事になるといつて、それを日課として毎日|怠《おこた》らず繰返《くりかへ》してゐるやうでした。私は其《その》話を聞いた時、たとひ私が耶蘇《やそ》教徒でないにせよ、バイブルは文學上必要の書物だから、さういふ課程をこしらへて、長い間に通讀したら嘸《さぞ》有益だらうと思つて、既に遣《や》り始めようと迄《まで》決心した事があります。然《しか》し好きな事にばかり夢中になり易い、又|厭《いや》な事に始終《しじゆう》追ひ懸《か》けられてゐた其《その》頃の私には、ついに夫《それ》すら果さずじまひに終りました。夫《それ》だから、私のバイブルに於ける知識は非常に貧弱なものです。さうして私の希臘《ギリシア》神話に於《おけ》る知識も亦《また》これに劣らぬ程|憐《あはれ》なものなのに過ぎません。

それがため學校を出て教師をしてゐる時分《じぶん》には、よく雙方の故事故典で悩まされました。仕方《しかた》なしにバイブルのコンコードانسを左右に置いたりクラシカル字彙《じみ》といふやうなものを机上に具

《そな》へたりして、何《ど》うか斯《こ》うか御茶を濁《にご》して通りました。甚だ切《せつ》ない事でした。切《せつ》ない許《ばかり》ならまだしも、時によると、馬鹿々々しくて腹の立つ事さへありました。

あなたが何《ど》んな動機から神話を譯して御覽になつたかはまだ解らないが、恐らく文學を研究する人の手引草《てびきぐさ》として許《ばかり》ではないでせう。今の人の手にする文學書には [#濁点付き片仮名ㇿ、1-7-83] ーナスとかバツカスとかいふ呑氣《のんき》な名前は餘《あま》り出て來ないやうです。希臘《ギリシア》のミソロジーを知らなくても、イブセンを読むには殆《ほと》んど差支《さしつかへ》ないでせう。もつと皮肉にいふと、人生に切實な文學には遠い昔しのお話や故典は何《ど》うでも構《かま》はないといふ所に詰《つま》りは落ちて來さうです。あなたもそれは御承知でせう。それでゐてこんな夢のやうなものを八ヶ月もかゝつて譯したのは、恐らく餘《あま》りに切實な人生に堪へられないで、古い昔の、有つたやうな又無いやうな物語に、疲れ過ぎた現代的の心を遊ばせる積《つも》りではなかつたでせうか、もし左右《さう》ならば私も全く御同感です。其意味を面倒に述べ立てるのは大袈裟《おほげさ》だから止《よ》しますが、私は自分で小説を書くとき《その》あとが心持が悪い。それで呑氣《のんき》な支那《しな》の詩などを讀んで埋め合せを付けてゐます。夫《それ》から大病中 | 徒然《つれづれ》を慰《なぐさ》めるため繪《繪》といふ名はちと分《ぶん》に過ぎるから、繪のやうなものと云つた方が適切ですが) 其《その》繪を描いて遊んでゐると、矢張《やは》り仙人だの坊主だの山水だのが天然自然題目になります。是《これ》もある意味に於《おい》てあなたの神話に丹精《たんせい》を盡したと同じ動機になるのではありますまいか。弱い神經衰弱症の人間が無暗《むやみ》に他の心を付度《そんたく》して好い加減《かげん》な事を申して済みません。もし間違つたら御勘辨を願ひます。

最後に神様の名前の發音に就《つ》いて一寸《ちよつと》申上げます。あなたの發音法は大部分大陸 | 讀方《よみかた》(コンチネンタル・メソッド)を用ゐられた様《やう》ですが、日本で云ひ慣《な》らされたバツカスとか [#濁点付き片仮名ㇿ、1-7-83] ーナスとか云ふのは英吉利《イギリス》讀《よみ》にされたと見えますから其邊《そのへん》は一寸《ちよつと》讀者に注意して置いて遣《や》らないと悪いだらうと思ひます。夫《それ》から又 | 羅甸《ラテン》讀《よみ》にしてもクオンチチイを付けて發音しないで、のべつに羅馬《ローマ》字綴りの讀み方 | 見《み》たやうに遣《や》つたのがあるなら、夫《それ》も序《ついで》に斷《ことわ》つて置いて御遣《おや》んなさい。

序を書きたいのは山々《やまやま》ですが序らしい序が書けないので此《この》手紙を書きました。若《も》し序の代りにでも御用ひが出来るなら何《ど》うぞ御使ひ下さいまし。以上。

六月十日

[#地から3字上げ] 夏目金之助

野上八重子様

[#地付き] (大正二年)

底本：「ギリシア・ローマ神話」ブルフィンチ作、野上弥生子訳、岩波文庫、岩波書店

1978 (昭和53) 年8月16日改版第1刷発行

1988 (昭和63) 年8月15日第17刷発行

底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」(区点番号5-86)を、大振りにつくっています。

入力：鈴木厚司

校正：kamille

2004年7月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。